

報 告

公開講座抄録

Angels and Clouds

A psychoanalytic reflection on 'The Annunciation'

母子関係と創造性

—ウイニコット理論から「受胎告知」を理解する—

(2016. 10. 2 於：京都テルサ)

講 師：Jan Abram（京都大学大学院教育学研究科客員教授
/英国精神分析協会訓練分析家・スーパーヴァイザー）
通 訳：Dalrymple 規子（中部学院大学短期大学部准教授）
司 会：松 下 姫 歌（京都大学大学院教育学研究科准教授）
挨 拶：岡 野 憲一郎（京都大学大学院教育学研究科教授
/臨床教育実践研究センター長）

ご 挨 拶

岡野憲一郎（京都大学大学院教育学研究科教授 臨床教育実践研究センター長）

みなさんこんにちは。残暑厳しい中をご参加いただき本当にありがとうございました。毎年恒例の、外国からの客員教授をお迎えして、公開講座を行っています。今年はジャン・アブラム先生をお迎えして、『母子関係と創造性』という題で開催します。ジャン先生については、パンフレットには簡単なお紹介があるのですが、英国の精神分析家でいらっしゃいます。特にウイニコットに対する造詣が深い先生です。京都大学に8月9月10月と3カ月間、いらして我々に色々なことを教えていただいています。先生はミドルセックス大学をご卒業なさって、現在では英国精神分析協会訓練分析家およびスーパーヴァイザーをなさっております。今日は合計3時間くらいです。この機会がみなさんにとって、学びの機会となることを祈っております。挨拶に代えさせていただきます。

松下： それでは、ジャン・アブラム教授からご講演をいただきます。本講座では新約聖書におけるエ

ピソードの一つである受胎告知が取り上げられます。受胎告知は、天使ガブリエルが、処女マリアに神の子を身籠ったことを告げる場面で、古くからキリスト教美術において描かれてきたモチーフです。その物語は早期の母親－乳児の関係を重視するウィニコットの理論と深い関わりがあり、普通の献身、原初的創造性といった概念を手掛かりとして、受胎告知の物語の象徴性についてお話いただきます。また、精神分析臨床と芸術家の創造的活動の共通性についても、解説していただく予定になっております。それでは、講師のジャン・アブラム先生と、通訳をしてくださるダーリンプル規子先生に、ご登壇いただきましょう。(拍手)

第 1 部 講演 母子関係と創造性—ウィニコット理論から「受胎告知」を理解する—
ジャン・アブラム (通訳 ダーリンプル規子)

こんにちは。今日はお招きいただき光栄に思います。ありがとうございます。いっぱい話したいことがあります。さっそく始めたいと思います。

今日の話は、2 つのパートからなっています。最初の部分は、イタリアの芸術家であるリノ・マノッチの作品を紹介いたします。彼はキリスト神学からの受胎告知を描いている芸術作品に長く様々な考えを呼び起こされています。その芸術の象徴的な意義を現世的にしようとする試みにおいてマノッチは、受胎告知は芸術家の試みを表していると言っています。この第一部においては、まずはイギリス、ケンブリッジのフィッツ・ウィリアム美術館の館長を務めていたときに行った展覧会のために、マノッチによって選ばれた個展の銅板刷りの受胎告知をお見せしようと思っています。それから、その銅板刷りに対する応答としてマノッチの単刷りの版画をお見せしたいと思っています。

第 2 部としては受胎告知を精神分析的に考える、というわたしの考えを話します。わたしの見方は、臨床精神分析家としての仕事に基づいていて、今も行っているドナルド・ウィニコットの仕事に対する研究によって補完されています。ウィニコットは、特色ある精神分析の理論的枠組みを発展させていった重要な貢献をしてきた人です。わたしは、受胎告知が個人の、概念化したり、考えたりする能力につながる過程を表していると提案します。ウィニコットはこの過程を、対象を創造していく過程と呼び、それは早期の親子関係にあると言っています。わたしは、どのようにこの初期の関係が精神分析の治療関係に繋がるかを説明してみようと思っています。

芸術家、精神分析家、そしてわたしたち一人一人にとっての創造性の概念について、いくつかの考えを述べ、まとめとしたいと思います。

テーマに対して少し一言。わたしの臨床および理論の考えとともに、今日付け加える大切なことなのですが、今日これから皆さんと一緒に考えていきたいアートは、キリスト神学に根付いたものであります。わたし自身の立場は無信教です。つまり、わたしは、宗教を用いなくて人間理解の発達について、一つのことに集中しているイギリスの人間主義者です。わたしからすると、精神分析は非常に人間主義的な知識や価値を大事にして、実践によって構成されているものです。

このことは、皆さんのご想像のように、宗教のない非宗教的な国、日本にいることはわたしにとってとても適しています。もちろん、日本の元々の宗教は神道であり、6世紀には仏教が入ってきたことは、わたしの心にしっかり入っています。有神論的なことについて考えてみますと、つまり最高の存在がいることへの信仰ですけれども、皆さんご存知のように神道は、一神教ですね。それに対して仏教は、本質的には一人の神もいません。両宗教とも明らかに一神教のキリスト教とはかなり違っています。現代の日本は、非宗教の国ではありますが、それにもかかわらず、本州とか九州とか四国とかのそれぞれの群島において様々な宗教の教義が守られていると理解しています。

皆さんが宗教的であれ、そうでないにしろ、今日は皆さんと一緒に古代の芸術作品の同じテーマのもとに描かれた作品について、現代のリノ・マノッチの作品と並べながら考えを分かち合えればと思います。

まずは、今日の内容の主な見解の概要をご提示したいと思います。キリスト教における受胎告知は、天使ガブリエルが、マリアに、彼女が神の子となるイエス・キリストをみごもる人となると、神に選ばれたことを告げるものです。受胎告知は天使ガブリエルとマリアの出会いを表現しています。この物語はキリスト教の教理においては、非常に重要なものです。なぜならば、それは、キリストの顕現、つまり神が人となられたことにつながるからです。神が人の姿になったというのはキリスト教の中心の教義です。それは、キリストの十字架の処刑に象徴される世界の救いの前兆を表してもいるからです。人間化と救いの両方の重要性に、その出来事は芸術家や版画家に描かれました。これらの芸術作品はルネサンスやバロック時代の祈りのための芸術として知られるようになりました。この時代のころに人文主義の発達は、レジデリウス・エラスムスによって始まりました。彼は人文主義の倫理上の本質の典型である『愚かしさの賞賛』という本を書きました。

精神分析家のドナルド・ウィニコットはジグムント・フロイトに続いて、親子関係に焦点を置いた精神分析を発展させました。程よい母親による普通の献身は、誕生時から乳児の原初的な創造性を促進します。現代の臨床精神分析の中心にあるこれらのコンセプトは、これから見るマノッチの受胎告知についての文章・絵から発しているテーマとも強く響き合っています。まずはリノ・マノッチの、創造的に心揺り動かされているその元をお示しするために、彼によって選ばれた古代の版画の一つを見てみましょう。

これは、イタリアで1584年ころに、フェデリコ・バロッチによって作られたエッジングの版画です。このシーンのいくつかの特徴について注目してみたいと思います。天使ガブリエルとマリアの身体言語に注目して見てみてください。マリアの顔の表情を見てみてください。彼女は喜んでいますか？それとも動揺しているのでしょうか？室内装飾を見てみてください。この感じではお部屋のような感じです。外の世界の描かれ方にも注目してみてください。天使の手には百合の花があります。そして、寝ている猫がいます。

それでは、今度は、これに対するマノッチの単刷り版画のほうを見てみましょう。これは『ダフネーのアポロの最初の愛』と題がついています。マノッチはこの絵に対する情緒的様相を描写し、これらをよく調べていた時に、何かわからないけれど、心を揺り動かされる、と述べています。この版画のタイトル、『ダフネーのアポロの最初の愛』は、違う処女についてのギリシャ神話が呼び起されたことが分か

ります。ダフネーは森の中でスポーツに興じるために、処女のままでいることを望みました。エロスから金の矢を刺されたアポロは、ダフネーに恋をしました。ダフネーが、彼女を自分のものにしようとするアポロの願望から逃れられないと分かった時、彼女は父親に自分の形を変えるように懇願します。父親はそれにこたえて、彼女を月桂樹に変化させました。このようなことでアポロの愛は変わらず、彼は永遠に若さを保つ力を使って、彼女を常緑にしました。これが、月桂樹がいつも緑である理由です。

『天使と乙女』について。後ほど早期ルネッサンス期のイタリアにおいて、祈祷、そして芸術的な理由において個人的に所有されていた古代の版画をもっともっと見ていきたいと思いますが、その前にどのようにマノッチが独創的な展覧会を開催したかを述べさせてください。

最初にフィッツ・ウィリアム美術館というところに保管してあったコレクションの中からそれらの版画を選びました。それらは額に入れられ小さな部屋にかけられました。彼はこの展覧会を『天使と乙女』と名付け、『受胎告知における簡潔な歴史』という表題の付いた展覧会とともに、カタログを描きました。自分のテーマにかかわる彼の文章は何年にもわたってこのテーマと深くかかわってきたことを証明するものです。マノッチはこれらのシーンは、わたしたちが“生命の事実”についての知識を持つ前に生み出されたものである、という事実についてコメントをしています。これはこの作品群が、どのように女性が妊娠するのかを説明したものになります。宗教的な話においては、マノッチは、**St. John Chrysostom** は、受胎告知は神と人間の理想的な結合を表していると言うことに気づかせてくれます。そして、人間と神様が結合していることは、神が人間として姿を現すことにつながっていきます。

そして、次にマノッチは『ルカによる福音書』（新約聖書）にあります、受胎告知の簡潔な記述を、一つ一つの違う版画における限りない量の詳細な描写と対比しています。そして、これらの版画は、たとえば、寝室、ベッド、窓、庭、絵巻物、本、百合の花、鳩、聖書を置く台、ボール、かばんなど陰のアイテムで満たされています。そして猫もよくいます。15世紀のイタリアにおいては、画家たちは教会と繋がっていて、物語を飾り立てて話す様々な牧師の説教に、強く影響されていました。アイテムが先ほど挙げていた、シンボルのようなもの—それを表現するよう教会によって導かれていた芸術家に影響を及ぼしました。この時期の最も有名なイタリアの牧師でもあり、その当時のエラスムスでもあったのは、ロベルト・カラッチオロでした。マノッチはカラッチオロがいかにか 1479 年に受胎告知の物語を劇的に表現して説教を行ったかについて書いています。この説教は 1489 年に出版されましたが、その表題は『神の恵みを受けた乙女の 5 つの賞賛に値するコンディション』というものでした。カラッチオロは、マリアが連続した 5 つの異なった情緒において、天使による告知に答えていると確認しています。彼は、一つ一つの情緒をコンディション、状態として賞賛しています。

最初はコントラバーティオ、不安、動揺です。マリアは突然の天使の出現にびっくりしました。二つ目は、コジタティオ、熟考です。マリアは天使の言葉を熟考しているからです。三つ目のコンディションは、インテロガティオで、マリアが天使に質問しているときです。四つ目は、彼女が神に選ばれたことを受け入れている、ヒュミディターティオ、あるいは服従です。5 つ目は最後のコンディションで、妊娠の瞬間、あるいは価値のあるものを得る。この連続性を心に留めながら、版画の作品を見ていきましょう。

天使もマリアも視線を下に考えている様子です。天使は羽があって、彼が神の使いであることを示す

杖を持っています。二人ともかなり豪華な洋服を着ていて、多分教会の中にいます。マリアは左手に本を持っていて、おそらく二番目の状況である熟考を表しているように見えます。これも独特な内装が施されて、天使がマリアを困らせているようです。マリアは胸の前に手を組んで、最初の状態である、気がかりな、動揺している様子です。天使の羽が大きく、雄々しい。彼は急いできたように見えます。背景にある大きな窓を見たところからは、広い世界が見えています。そして、鳩がマリアの頭の上にあります。

これは三番目のところです。マリアが本を手にもって跪いている、祈っている。おそらく、メディターティオ、妊娠している瞬間を表現しているように思います。神様は雲の上に座っていて、上のほうから、光が鳩のところから下に向かっていきます。天使もマリアの顔も幸福に満ち溢れているようです。これが妊娠の瞬間のように思われます。

部屋の内装です。この木版画はおとぎ話のようにも見えます。マリアは少し子どもっぽく見えます。『ルカによる福音書』によると彼女は 16 歳です。マリアは本を見ている。それに対して天使は並外れて大きくて、羽に対して体がすごく大きくて、脅しているようにも見えます。

マリアは跪いているのですけれど、足が見えない、天使からいつでも飛んでいけるような気がします。これは一番初めの動揺している状態でしょうか。天使が上に手をかざして、上に向かっていく動きがあるのと同時に神様は高いところから見下ろしています。

ここには、ケルビム、小さな天使たちがひしめいて飛んでいます。マリアは 4 番目の受け入れている、受容している状態で、その上を飛んでいます。大きな天使は若々しくて、青年のように見えます。彼はとても誠実で、強迫的には見えません。

神様の周りに、光あふれる中で 9 人の小さな天使が群がっている。大きな天使は微笑んでいて、筋肉のある青年のようです。これはマリアがどうやら質問しているように見えます。

この天使は、とても謙虚で親切に見えます。右手は伸ばして左手は百合の花を持っています。マリアは不思議な満足した表情をしています。彼女は、4 つ目の受容の状態だと思います。

前に寝ている猫がいます、後ろにあります背景には窓から大きなお家、お城が見えます。強そうな天使が部屋の中に天から降りて入ってきています。聖書の象徴である鳩によって放たれている光も下にさしています。マリアは起こっていることに対して、もがくことなく受け入れているように見えます。右手がおそらく最後のコンディションである妊娠の状態を表しています。天使は女性で、彼女自身も妊娠 6 か月です。マリアは彼女に質問しているようです。13 の小さな天使たちが体をねじらせてともにいます。彼らは新生児のようで、新生児よりももっと洗練されています。

膝をついて祈りをしているマリアは、穏やかに身を低くしている天使に向いて見えています。天使は優しい感じで、慎重であるようにも見えます。神からのメッセージを運んできたのでしょう。

威張った若い天使が、32 人の羽をもった小さな天使たちを引き連れているのが見えます。マリアは第 4 のコンディションに見えます。それはマリアが自分の運命を謙虚に受け入れているように見えるからです。

今までは、全部『受胎告知』というタイトルがついていたのですけれど、これだけタイトルが違います。これは『神と天使ガブリエルが受胎告知を予期しながら、そしてマリアはその下で跪いて』という

タイトルです。この版画は、違った物語の部分表現しています。なぜなら、受胎告知の前の時だからです。神が天使ガブリエルに指示しているのが見えますし、家族も群集、何か来るのを待っていることが分かります。

さて、マノッチの閃きのもととなっているものを見てきましたが、今度は彼のアーティストの応答として表現している彼の単刷り版画の作品を見ていきたいと思います。

マノッチは、彼の受胎告知との関係は半分だけ理解している、何かはあるのだけれどはっきりはしない、というほの暗い明りの中で進展している。この半分の明かり、彼がよく使っている『半影』という言葉です。これはオックスフォード英語辞典においては、全く光の当たらない、影のまわりにある部分的に薄く影になっているところで、その部分で光を出している側の光の一部分が妨げられているところと定義しています。半影を、彼が楽しく味わっていると述べています。彼はこの明らかであることに對して慎重です。それでこの半影、少し薄暗い状態において、その中で強く動かされる、再び表現される必要のある何か、その奥深さから、マノッチはこの単刷りの技術を通して、彼の新しい抽象芸術作品を作り出すことを選びます。その前の 18 年間は、彼は比喩的な受胎告知をあらわすのにオイルを使っています。マノッチはインクの偶然の効果のメリットが使える、同時にそれぞれのイメージを統制できる単刷り版画の寛容性について説明しています。単刷り版画にぴったりのタイトル、『雲と神話』。これはマノッチがこれしかないと言ったタイトル。世俗化するプロセス過程を間接的に示し、そこにあらわれている感情は知らない、分からない状態の喜びであると同時に、逆説的に、絶え間なく生き残り、分かろうとする懸命な努力に没頭することです。

それでは展覧会のカタログのためにマノッチが選んだ順に彼の版画を見ていきましょう。それぞれが出たときにタイトルを読みます。(スライドで版画を鑑賞)

『わたしはまさに環境の奴隷である』『雲』『ダニメデス』『ダフネーへの恋に落ちたアポロ』『一つのゴムが彼女の乱れた髪をまとめる』『前方にオオカミと羊』『まだわたしは愛しているアポロ』『海、戦争』『わたしは地と水の娘です』そして、『空の乳飲み子』『海と岸を無事に通過する』『わたしは変化するが、死ねない』『空に雲』『わたしは主の召使い』『あなたの言われたことが実現しますように』『それから天使は彼女のもとを去った』『不妊と言われた女性』『神の力は永久的に偉大である』『わたしに触るな』『ヒビキアの娘スザンナ』『そしてスザンナも悲鳴をあげる』『老いた夫が彼女に大声で叫ぶ』『スザンナがうめいた』『他には誰もいなかった』『神は彼女の祈りを聞いた』『わたしをずっと処女でいさせてください』『どうぞ違った存在に』『獣でもなく人でもなく、ましては神でもなく』『人生が大事だと人々は言う』『しかしわたしは描くほうがいい』『会話』『紳士が優雅な馬を所有して』『コーンウォール地方からローマに行く』『騎士』

ここまで見てきてみなさんもこれらの版画に対しご自分の連想を持たれたと思います。天使と乙女とリノ・マノッチと単刷り版画と雲と神話でした。

芸術的な創造という行為と受胎告知との関係で、マノッチは、なぜ自分が描き、受胎告知に対して自分の応答を創作する必要性を感じているかは明らかです。たとえこの明らかさが逆説的に、部分的に陰になっている性についてだけでも、です。マノッチにとって受胎告知は、描くという活動にとって大変魅力的なメタファーであると言っています。

ここに彼は但し書きをつけています。わたしたちが創造性の過程を見ていくとすると、わたしたちは反対の方も考えていかないといけない。それは破壊です。死は、赤ん坊が生まれる前には羊水の中に住んでいる、という言葉は、おそらく絶えず続く生き返りの循環を説明していると思います。暴力、暴行、殺人というのも聖書の中の物語のテーマにもなっています。いくつかの物語が、マノッチの版画を呼び起こしていることに気づかれたと思います。ヒルキアの娘のスザンナの話もその一つです。彼女は、愛人と会っていることに長老たちに告発されたのですが、実際には彼女を渴望していたのは長老たちだった。これは貞操と潔白が勝った性についてのお話です。

それでは今日の第二部に入っていきます。これからわたしの無神論の視点から、受胎告知のそのもとに横たわっている象徴的な意味に関して、非宗教的な概念を呈示するために、いくつかの精神的な考え方の側面を呈示していきたいと思います。マノッチは、受胎告知は、芸術家の試みを表現していると言っています。つまりそれは絵を描く行為の比喩です。わたしは、マノッチの論述は説得力があると感じました。わたしは彼の呈示したものを精神分析から生じたいくつかの考えで、拮げてみたいと思います。

まずジグムント・フロイトの研究を思い出すことが大切です。それはウィニコットの理論の原型のもとを構成するもの、実際にすべての精神分析の進歩の基となっているのがフロイトの研究だからです。もともと話すという治療で知られているように、フロイトは、オーストリアのウィーンで 19 世紀の変わり目に新しい分野を開拓しました。彼はヒステリー症で苦しんでいる自分の患者が、子ども時代のトラウマの出来事を話せるようになったら、その症状から回復することができたことを発見しました。しかし、その症状は、患者が自分の話している記憶に情動的に噛み合っていると感じるができるときに軽減できるのです。患者は寝椅子に横たわり、頭に浮かんで来たどんなことでもいいので話すように言われました。この方法は、自由連想法として知られました。分析者は、寝椅子の後ろに座り、患者の自由に連想して出てきた話を聞くことが最初の仕事でした。分析者は患者の言葉の無意識の意味について、考えが浮かんだ時に解釈を提供しました。もし患者が、分析家の言葉を利用することができれば、フロイトは患者が少しずつ自分の内面世界についてより理解できるようになってくることを発見しました。本当にしばしば症状が減少していきました。それは心がより統合されていったからでした。この方法論は今日でも使われてきています。それは、この方法が効果的だと証明されてきているからです。

カール・ユングがジグムント・フロイトの早期の最も重要な協力者であったことを述べるのは大切なことだと思います。何年か一緒に働いた後、彼らはいくつかの基本的な概念について不一致になり、それぞれの道へと分かれることになりました。現代のユング派は、独自の理論と方法を発展させてはいませんが、そこには患者が寝椅子に寝て、夢や自由連想を解釈するものも含まれています。つまり、現代ユング派とフロイト派は適合した点もあるのです。

フロイトやウィニコット、そして現代の大多数の精神分析家たちにとって、妥当な治療方法だけでなく、研究方法を構成しているのがこの分析的臨床のワークです。「分析的なセッティング」は、新しい進歩が発展するかもしれない科学の研究室と同等とみることができます。寝椅子と自由連想の方法論は過去 100 年間ほとんど変化しておりませんが、理論は確実に進歩してきています。今日、国際的なレベルにおける精神分析の理論と実践は、個人の自我は最初の関係性、親と乳児関係から発展していくことを

示しています。この理解はウィニコットによって行われてきた重要な精神的な進展と大いに関係しています。

ウィニコットと彼の分析への寄与について。ウィニコットは小児科を専門とした医師でした。彼は1935年に、精神分析家であり、子供の分析家として資格を得ました。彼は、乳幼児の心の状態を正しく理解する能力は、彼の個人分析から生じていると断言していました。赤ちゃんが言葉を言わない人間の存在として大事だと思います。そして、幼児性、乳児性はどの大人も持っている。すべての分析家は個人分析を受ける義務があると述べる必要があるでしょう。このプロセスは、すべての分析的臨床家には必要不可欠なものです。分析家は、自分たちの内面世界を理解することを要求されるのです。1931～1971年の間にウィニコットは理論と実践においていくつかの進展を展開させました。ウィニコットは、すべての人間にとってすべての中心の問題は、親子関係に源があると言っています。このことは、彼の考え方の中心になっています。

ここで、受胎告知と関係する具体的な概念の対応を紹介しましょう。精神的な臨床と並行として、小児科としての臨床を通し、特に誕生直後からの早期何週間かにおいて、母親の乳児への特別に集中した注意力が、母親が情緒的に献身的な状態に支配されるようになったのだと観察しました。彼は、これは健康的、普通のことであり気が付きました。母親はそのような心の状態になるように学んでいたわけではありませんでした。それは自然に起こった。彼は、この状態を『普通の献身』と名付けました。母性的に夢中になることができた新しいお母さんは、赤ん坊にきわめて重要な人生の始まりを与えたのでした。強い自己に対する感覚を発達させるために、新生児は普通に没頭している母親によって自分に差し迫った欲求が満たされなければなりません。例えば、彼が空腹を感じたとします。しかし、彼にとって世界はあまりにも未経験なので、彼は空腹を体験しているとはまだ分かりません。しかし、母親は理解します。母親は赤ん坊に乳をあげ、赤ちゃんはそれを飲みます。もし赤ん坊がしゃべることが出来るたすると、これが、僕がほしかったものだ、ときっと言うでしょう。こういうことが何回も起こると、赤ちゃんは自分が強く、強靱に感じられるでしょう。このように、赤ちゃんが必要としているものが現れるので、この経験を何度も何度もして、赤ちゃんは、自分に対し、自分が必要だと思うもの（食べ物、心地よさ）を毎回得ることができる、きっと自分は神に違いないと言うでしょう。言い換えれば、赤ちゃんの欲求が満たされる現実の体験から、自分がお乳やミルク・食べ物を創造していると勘違いするのは、この体験の蓄積が、万能感を赤ちゃんに感じさせます。ウィニコットは、この体験を『万能感への幻想』と呼びました。そして、人生の最初のこの体験は、健康な自己感の核の部分であると言っています。

どのように赤ちゃんは、この幻想を創造するのでしょうか。ウィニコットは、生き残るための本能的な力を原初的創造 *primary creativity* と名付けました。わたしは先ほど乳児が、自分が食物、対象を創造したとを感じるがゆえに、赤ちゃんが万能感を幻想することについて言及しました。この感覚は、母親が赤ちゃんの要求に対応できたときにのみ体験できる。この理論は、母親が赤ちゃんの対象を創造することをどのように促進するかを明白にします。最適な状況において、大体妊娠9か月を過ぎたころまでに、母親は赤ん坊を迎え入れる準備ができ、赤ん坊も生まれる準備が整います。赤ん坊が生まれると、程よい母親は、繊細に、完全依存状態である新生児に合わせていきます。母親の鋭い感性は、赤ん坊が

何を一番必要としているかを見つけ出そうとする強い願望を意味しています。もしわたしたちがこの願望を言葉に置き換えるとすると、母親は、次のように赤ん坊に言っている様子です。世界に自分自身の考えを、自分自身の創造性を持っていらっしやい。世界を創造しなさい。あなた自身の創造したもののみがあなたにとって意味のあるものとなるでしょう。世界は、あなたの支配の中にありますと。この体験は愛されている感覚や自己感の中心にくるものであり、赤ん坊は対象を創造することができます。

さて、観察者の視点から言うと、自分の要求がすべて満たされる、天国のような状態にいる赤ん坊の感覚は、永遠に続きません。事実、母親がそれに没頭し続けることはできない現実原則が必ず働きはじめます。赤ちゃんの幻想は幻滅の過程に変わっていきます。幻想の体験が十分強く、十分長く続いた限りにおいて、次に必要なステージである幻滅状態が、そこまでトラウマにならずに済みます。これは、普通の感情の発達の一部であり、一群です。

母親と分析家の間には類似点があります。分析家の役割と仕事は、母親の役割と仕事と同様です。分析家はコンサルティングの部屋の中と、彼女の心のうちに患者を迎えます。患者は寝椅子に横になって、自由連想することを求められます。分析家のセッティングである状況は、個々の患者に無意識の記憶を思い起こさせます。このように治療的關係は、早期の母子関係とよく似ています。それゆえ、分析家の解釈は、母親の赤ん坊の要求に合わせていく能力によく似ています。別の言葉で言えば、赤ん坊が自分の感情にもっと気づいていけるようになる能力を手助けしている。それは、母親の繊細な赤ん坊に響いている感受性であり、分析家が患者の無意識のコミュニケーションに合わせていこうとしていることと同じと言えます。この結果、患者は自分の内面の世界にもっと気づいていくことができます。患者の中の乳児との親密なつながりを通じて、次第に無意識から意識へと移動することができる。この分かったという認識のプロセスは、分析的なセッティングにより開始され、患者にとっても分析家にとっても、自分の内部で何か変化していく感覚を導いていく、緩やかな自己の啓発を形成します。

わたしは、受胎告知が親子関係、患者と分析家関係と深く響きあっていると思います。内面の理解、考えや思い、洞察を心に抱くことは、受胎告知と分析家の類推的な解釈を通して生じます。しかしフロイトが言っているように、解釈、あるいは受胎告知は、あるプロセスが関係の中で確立している場合のみ、何か意味するものとして浸透していきます。そんなことを考えてみると、マリアの5つの賞賛に値するコンディションと対象を創造する過程の間には、明らかな類似があると思います。

一つ一つのコンディションをもう一度見ていきましょう。まず一番のコントラバティオ。これは天使が現れたときの不安や動揺を意味します。トラウマ的である必要はありません。程よい分析家が、今がそのときだと思ったときに解釈を行います。しかしながら、それは患者が脇へ押しやっていた感情を明らかにするので、寝椅子の上の患者は、しばしば動揺します。コジタティオです。しかし、患者は分析家を信頼していますから、その解釈について一生懸命考える、熟考している自分も発見するでしょう。インテロガティオですね。しばしば患者はその意味を消化する方法として、解釈について質問したくなる過程があります。ヒュミディターティオ。これをそうすることは非常に心痛いことかもしれないけれど、解釈を受け入れる、分析家に身をゆだねるのに必要な才能がそこにあります。メルタティオです。妊娠のことですね。理解の始まりです。これはその前の4つの時期が理解のクライマックスにきた瞬間です。患者はその時、解釈を自分自身が保持できるものとすることができます。想い、考え、自己洞察

で創造されたものになります。この過程を経て、彼らは非常に個人的な意味付けをしたからです。

最後の考えを述べて二部のまとめとします。半影（薄暗い）と無意識。マノッチは薄暗い中での作業が好きだと書いています。これは谷崎潤一郎の随筆、陰影礼賛を連想させます。谷崎は、その中で日本の建築の様式美を賞賛しています。それは彼にとって、その薄暗さの中での影が互いに作用し合って、熟考する空間を促進しています。谷崎のように、マノッチも、曖昧な中の喜びを見つけると、はっきり言っています。これはどのように理解できるのでしょうか。わたしは、マノッチも谷崎もあまりにも明るくて明らかな、嘘の自分の世界に対する苦痛をあらわしていると感じます。なぜなら半分くらいの明るさでは見るのは難しいし、それゆえに抵抗したくなりますが、現実には無意識は完璧に理解することはできないからです。これは分析的なワークにも関係しています。分析家と患者は、いつもある種の薄暗さの中にいます。おそらくこれは意識と無意識の過程、互いに作用しあうことについて適切に考えていく方法でしょう。おそらく、その曖昧さの喜びは、マノッチの言葉を借りれば、知らないという状態が続いていることへの喜びと、同時に逆説的に生き残り、理解しようと懸命にもがいていることへ絶えず没頭していることに拮がっていくのでしょう。これは、表現することへの芸術家の試みだけではなく、分析家の試みにも思われます。もちろん谷崎は近代化、特に西洋からくる近代化という違うメッセージもしたためていたと思います。しかし、わたしはマノッチの、曖昧さの喜び、つまり薄暗さへの賛美と一致した響き合いがあると思います。自己の生き残りの現れである真の自己として説明できると思います。それは、マノッチの言う物語がはっきりしてきたときの統合における、理解の片鱗へと繋がっていきます。物事がはっきりしてくることは、マノッチによれば、受胎告知における安心させる側面です。そして分析においても、患者と分析家が二人ともから隠れていた何かを見るようになることは、真実です。つまり、それぞれの版画は統合のプロセスをも表現しているのです。違った点からみると、わたしたちはネオンライトに目が眩むときでさえも、薄暗闇のさまざまな影の中でみんな生きていることを理解すべきです。そして、この半分の明るさは、しばしば不安を起し、誤った解決を見つけることで、本物であることに対する感性を激減させてしまうのです。自分をだましたり、否定したりすることは精神保健的にはよくないことです。

『象徴の異なったレベル』フロイトの精神理論を無視できない 21 世紀の世界において、受胎告知は若い女性が処女を失う物語をも伝えていることを理解しなかったら、それは否定となるでしょう。その他にも、多くの物語が個々の版画について解釈ができて、また単刷り版画の中には暴力や虐待もあらわれています。例えばダフネーとアポロの物語は、ダフネーが男性からの性行為に対するおそれを強く示唆しています。

今日の話の要素も精神分析に関連することですので、そこに焦点を当てることもできましたが、それはまたの機会にいたします。受胎告知が暗示する性の心理的要素は全く否定することでもありませんし、マノッチも彼の版画のいくつかの中でそれとなく触れている一方、マノッチの考えは、性的な部分だけが課題としてあるわけではない。彼にとってその場面は、深い比喻の意味を持つものです。わたしは情緒的な発達への気づきを加えることによって、相互に関連付けることを提案しています。マノッチの考えは、概念のメタファーに関することです。芸術作品を創造することです。わたしの考えは、どのように人間が対象を創造するかの能力を土台に、創造的な生き方、積極的に、主体的に、生き方に没頭する

か、です。これが、わたしの最後の要点につながります。これらのイメージやこの話をどう思うかは、パーソナル、独自のなものでしょう。皆さんへの応答や考えと想い、皆さんの中に湧き上がってきたものは、芸術家のこれらのテーマに関する没頭から拡がって、彼が提供したものを受け取るあなたの才能に関係するでしょう。

言い換えれば、芸術家の試みは、わたしたちに見えていて、受け止められる対象物を創造した。わたしが強調したいことは、芸術の対象物を見ることにおいて、同時に5つの連続した、あなた自身の対象を創造する。その時を体験するのは、まぎれもなくあなたです。乙女と天使を吟味することを通してみてきたように、提供する方と受け取る方の中には本質的な人間関係のダイナミクスが創造します。対象を創造するのに必要不可欠なのが受容することです。わたしたちの創造は本能的な原初的創造性に端を発しています。これはわたしたちが他者とつながり、同様に彼らがわたしたちと繋がるという親密性を通してのみ成長する、内部の資質のまさに本質です。わたしたちが見ているものは我々の内部の資質に染み込んでいったものです。何も目には見えないけれど。

芸術と精神分析は、両方とも自分を発展させ、絶えず自分になる無限の潜在的可能性を提供してくれています。わたしたちはいつも、死ぬまで、死ぬ瞬間においても、いつもこの過程にいますし、そうありたいと思います。

<休 憩>

第2部 指定討論

岡野： ジャン先生、素晴らしいプレゼンテーションありがとうございました。いくつか質問を用意しています。アブラム先生の発表のテーマは受胎告知です。受胎告知というのは大天使ガブリエルが聖母マリアに、キリストを身ごもるということを告げることでですね。これが、今お話しにありました。二月前に先生が日本にいらした時に、日本の文化でこの受胎告知と同じような意味を持つものがあるのかと言われて、我々には想像がつかないとお答えしたのを覚えています。今でも想像できないのですが、受胎告知の概念、現象、ストーリーが、我々の文化には馴染みがそれほどないのは確かだと思います。ただキリスト教の世界の中では非常に大きな意味を持っていることが知られています。それで、このテーマをアブラム先生は精神分析の解釈と結びつけていることが、この講座の重要なポイントですね。つまり、分析家が患者さんに何かを解釈することと、Annunciation 受胎告知にパラレルに関係があるとそういうお話です。分析における解釈と受胎告知は、一見かけ離れているけれども、その媒介となるのが母子関係の問題だと思います。ここで引用されるのがウィニコットという分析家の理論です。アブラム先生はウィニコットの研究の第一人者とも言われています。その論旨は大変説得力があります。特に今日の後半の部分です。解釈に関しては、心にあって、思考にないもの、例えばおっぱいが欲しいという赤ちゃんに

対して母親がおっぱいを差し出すことで、子どもは、自分はおっぱいが欲しかったのだ、と分かるわけです。そこに意味を作り出す、創造するという創造的な、象徴的な意味での受胎のお話でした。アブラム先生は、そこにもう一つ段階を加えて、受胎告知が彼女の愛するマノッチという画家の作品に依れば、常に暗いところで行われるシーンが多いということです。そしてこれが、谷崎潤一郎の『陰影礼賛』と関係しています。ここが、アブラム先生が日本の文化にかなり造詣が深いことを示しています。ここでの陰影、つまり、あまりに明るいことが偽りの自己に結びつく。ですから偽りの自己を廃するという意味で陰影が大きな意味を持つのです。以下は、わたしの素朴な感想です。色々な知識を与えられて我々の中に色々なイメージ、質問が浮かんでいると思いますけれども、浮かんだ内容についてお話します。受胎告知についての日本人の馴染深さ、馴染薄さについて申し上げましたけれども、おそらく日本社会においては告知という明白な言葉により、人に何かを伝達することがどちらかといえば抑制される社会と思います。それで間接的な表現が用いられる傾向にあります。ただしこれは受胎告知とは違う話ですけども、少し関係してきます。子どもがお母さんに、赤ちゃんはどこから来たの、とよく尋ねます。その場合も日本人の親は、決して明らかなことを告げないことが多いのです。これは日本だけかは分かりませんが、すくなくとも日本ではそういう習慣があります。わたし自身は、この質問を自分の母親に向けたことをはっきり、その時の情景も覚えています。その返事は、「結婚して夫婦が一緒に、お父さんとお母さんが一緒に過ごしていると自然と子どもが出来て、時が来るとお腹がぱっくり割れて、出てくる」、というものでした。その情景も含めて、へえー、と思ったことをわたしよく覚えています。これはある意味の処女懐胎と言えるだろうと思います。わたしの頭の中では、これは性的な交渉、つまり非常に厄介な交渉を飛び越えて、子どもが産まれるというファンタジーを抱かせてくれると思っています。ですからキリスト教社会に住む人達もこの受胎告知の話を一種の安堵感と共に聞くのではないのでしょうか。それは人間の誕生が性交渉という動物的な行為を経ることなく生まれる発想に安心感を与えるからではないのでしょうか。日本ではある女優が、婚約発表の際「わたしは子どもをたまごで生みたい」と言いました。少し似たような発想ではないでしょうか。つまり、いやらしいこと、汚らしいことをせずにたまごを生みたいと。

処女懐胎が含む様々な意味での性愛性の否認が、今日のアブラム先生の話においては、少し聞かれましたけれども、確かにこれは、性愛性を廃した理論というよりは、性愛性を否認する形での議論ではないかと思うのです。わたしは、受胎告知は解釈であるという考えに概ね賛成です。けれども、若干別のことを考えていることを申し上げたいと思います。天使ガブリエルほどに治療者は真実を伝え、患者さんの運命を左右することはできるのだろうかという疑問です。治療者は、それほど偉大な存在で、色々なことを知っている存在なのだろうか。ガブリエルはマリアが懐胎することを宿命として予言した。分析家はそれほど確かさを持って、あなたの心にこういうものが生まれていると知ることができるのだろうかということです。もし治療者が自信を持って患者さんの無意識の内容をアナウンスしたとしたら、患者さんはそれに反応する形で無意識に内容を想像してしまいます。それはウィニコットのいうところの偽りの自己となってしまう可能性もあるのではないのでしょうか。これはフロイトが示唆 Suggestion といったことと関係しています。

ですから announcement が suggestion になる可能性がここにあり、敢えて言うとしたら、治療者は、あなたは意味を産出してもいいですよと告げる役割を果たすのです。意味を伝えるというよりは、あなたは何を創造してもいいのですよ、と伝えるのが治療者の役割なのでしょう。同時に、わたしはそれを何でも受け入れます、だからあなたは創ってもいいのです、と伝えるのが治療者だとしたら、少しピンとくる感じがしました。またアブラム先生は、患者さん、聖母マリアと子ども、母親と子どもの間の関係の子どもの側でしょうけれども、その側の感受性、受容性について言われました。それと同じくらいに重要になるのが治療者の側の受容性です。つまり患者が何を創造しようと治療者、母親はそれを感じとり、受け入れる姿勢です。場合によってはお母さんが、患者さんの、子どもの顔を見ることで、鏡のような役割を果たすのです。そのことで子どもが、自分は何かを作ってもいいのだ、実際に自分は創っているのだ、と感じるとしたら、お母さんの側のレセプティビティ、感受性も大事になると思いました。

最後にもうひとつ陰影との関係についてです。アブラム先生は、それが明白なこと、表面的なことが、偽りの自己の否定に繋がるとおっしゃいました。陰影については、わたしはそれに賛成するのですが、さらに言うとしたらその意味が産出される、発想がわくのは陰影でもあるし、無意識と意識の境目、はざま、臨界領域なのかなと思います。陰影は、陰影という言葉にはそういうニュアンスもあると思います。そこには必ずしも言葉による解釈は意味をなさないのではないかと思います。言葉とは、イメージ的なものです。解釈の文化とは違い、日本ではむしろ阿吽、両者の呼吸を重んじる。あるいは沈黙の美德を尊重するところがあると思います。ですからそのニュアンスの違いに、ひょっとしたらアブラム先生と、日本文化に対する我々の理解の仕方の中に違いがあるのではないかと思います。要するに受胎告知という言葉による伝達が、何かを目指すということより、もう少しノンバーバルなものが治療者から患者に伝わり、そして患者の中に何か生まれるのです。でも、それすらも言葉にならないもの、そういうレベルでのコミュニケーションが起きているのかなと思いました。以上が先生の発表をお聞きして思ったことです。この中でいくつか何か御示唆がありましたらお願いします。(拍手)

アブラム(ダーリンプル訳): とても興味深いディスカッション、討論、質問とご意見をありがとうございます。まずひとつ面白かったのが、子どもが育っていくこと、それから子どもが、自分がどのように生まれてきたのか、比較の部分がとても面白かったです。特にわたしが、なるほど、と思わせられたのは、岡野先生自身が子どものときに、どう生まれてきたのかの問いと答えです。その感覚はおそらく子ども自身、そしてマリアが言われた時の視点なのかなと思いました。そこに文化的な違いがあるかは、わたしは分かりません。わたし自身も岡野先生と同じような体験をしているからです。赤ちゃんはお腹から出てくると言われた、女優がたまごで生みたいと言った、これらはとても興味深いです。わたしのところで彼女が精神分析を受けて、寝椅子のところに寝ていてそう言われたら、あなたはセックスをするのではなく・・・と言っていると思います。この解釈が彼女を助けると思います。ここのところが、おそらくわたし自身が、受胎告知と解釈というものの類似性、大事だと思います。わたしは、全く同感します。分析家は患者にとっての真実を持っている訳ではないです。ウィニコットが何人かの分析家に対して、とても批判的に言って

います。まるでその患者さんの全てを知っているかのように言っているけれども、それは間違っていると。ですからウィニコットがいう解釈というものは、あなたがこうだ、と断言するのではなくて、患者が自分自身を発達させていく、自分自身を発達させようとする力を助けていくことが大事だと言っています。

もうひとつ、岡野先生が言われた、アナリスト、分析家が言うことを、そのまま患者さんが受け入れてしまうことに対して、それで良いのかがありました。岡野先生の言われる通りだと思えます。分析家が何か介入していくときに、こうだと言ってそれをそのまま患者さんが受け入れてしまうのはとても危険です。このことに関してはウィニコットも良くないと言っています。ウィニコットが言うのは、人生を生きていく時に全てを受け入れる形で生きていくことは、本当の命、生きることではないです。そういうことをわたしは言いましたが、実はもう何年も分析家をしていてわたし自身が、わかるよ、あなた、こうじゃないかと思わず言いたくなってしまふ。そういう状態が出てくることもあります。でも、そこを自分の中で思い止まり、彼らが自身で気づいていく状態にする必要をいつも考えています。患者さんだけではなく、わたし自身も変わって…分析家も変わるべきです。お母さんも自分を受け入れて、子どもとの間で色々とやり取りをしていく、相互交流していく、変わっていくのと同じように、わたし達も患者さんと変わっていくのでなければ、本当の自分が見いだせないと思います。ここでは分析の 1 つの技法、聴くという話を先ほどしました。聴くことは話を聴く、患者さんの話を聴くこともあります。わたしが言っていることを、患者さんがどう捉えているかも大事になる、この **Listening** の部分。

ここで女優の話に戻りましょう。たまごで赤ちゃんを産みたいについて、例えば、わたしが、あなたはセックスをしたくないのねと言ったらこれは解釈になるのでしょうか。女優さんが患者さんであったとして、本当にたまごで生みたいと信じていた時に、それが性行為に対する自分の中の防衛で言われているとする。それはいわゆるさきほどの五つの心の状態にありました一番初めの不安の状態と思います。例えば、その状態にあったとして、その人はどのくらい、この寝椅子に寝たことがあるのか、回数、時間も含めて。例えば今まで、分析家は、もしかしたら何回かは少し言わない時があったのかもしれない。今だという時に言うことがあるのかもしれない。こういうことを考えていく。それが、薄暗い中での状態です。

そして、岡野先生が最後におっしゃった、日本とヨーロッパの文化の違い。ノンバーバル、言葉ではない部分。受胎告知は告知ですから伝えることですが、分析は言葉で表現するのが大事なところ。表現しているのか、表現していないものの、その間も大事なことになってきます。お互いの文化の中でも、それをお互いに出していきながら、ミックスさせるといいますか、そういうところは大事なことだと思います。

松下： ありがとうございます。受胎告知を分析のプロセスと重ねて見るのはすごく面白いなと思って聞いていました。わたしは、ユングアンの立場なので、さきほどの岡野先生の対話の中でも出てきましたけども、クライアント自身が解釈をしていくというところ、そのところでクライアントが無意識の内に行っている解釈があり、意識と無意識の間の臨界領域に生じてくるイメージが既にクライアントの心による解釈だと思っています。それが一般に言う、考え、ということもあれ

ば、自分でもよくわからないイメージ、夢、あるいはそれが症状になることもある。症状を抱えることも、既にクライアントが自分の心の現実についての一つの解釈をしている。そこに実は新しい自分を見出すポイントが含まれていると見えるようなことがあります。だから症状を抱えることを受胎告知のように、捉えているところがあります。キリスト教の文化の中でも、キリストを受胎することや、キリストの存在も重ねて見た時に意味があると思いました。そういった意味で、先ほど言われた受胎告知の五つのコンディションが、セラピストとクライアントの間のことでも起こることがある、一方でクライアントの中での内的な関係のコンディションと見ることができる、と思ったのが一つです。それをどうお考えになりますか。

アブラム（ダーリンプル訳）： 受胎告知というものと、その症状や夢と同じであると、松下先生はおっしゃりたかったのですよね。まず、このことは、たくさん時間でしっかり話し合った方がいいと思う大事な、貴重な質問だと思います。まず大事なこと、臨床的な実際の事例があり、その中の、これということ、話し合うのが本当は一番いいかなと思います。わたしが思うのは、フロイトが言ったように、夢は症状のようなものということですが、それは分析家に対してのギフトであり、対象を自分の中に獲得するのに向かっていくために大事なものだと思っています。このことに関して何かご意見ありますか。

松下： わたしもそうだなと思います。

アブラム（ダーリンプル訳）： おっしゃる通り、わたしもその患者さんの内部で起こっている五つの状態があるとは思いますが、患者さんの心の中にある、そこで生き残っている対象物、そこにいる人、それを患者と分析家の関係の中で、さらに発展させていき、それが何かを引き出していくときに、この関係はとても大事になると思います。

松下： わたしもそう思います。ありがとうございます。

質疑応答

松下： では、他にもお聞きしたいことあるのですが、時間がございますので、フロアの皆さん方からもご質問、ご感想など頂けたらと思います。いかかでしょうか。ご発言の時にご所属とお名前もおっしゃって下さい。

質問者 1： スクールカウンセラーをしております。受胎告知の話で考えたことがなかったのでとても興味深いご講義をありがとうございました。お尋ねしたいことは、連想になるのですが、生まれ、受胎告知についてです。何というのでしょうか、宿った子どもが、例えばトーマス・オグデンのいう分析の第三主体のようなものが、その子にあたると連想をしましたけれども、先生はどうお考えでしょうか。

アブラム（ダーリンプル訳）： わたしは、そうだとは思わないですね。ここでの宿った子どもは、マリアに所属していると言うと、少し変ですが、その中にある。オグデンが言っている Analytic third 第三主体は、分析家と患者の間というところで、分析の状況の中にあるようなものと捉えているので、マリアの中にあるものとは少し違うのかもしれないと思います。分かりましたでし

ようか。

質問者 1：はい、とてもよくわかりました。ありがとうございます。

松下：ありがとうございました。他にご質問ございますか。

質問者 2：大学の聴講生です。質問と言いますか、お話の中で、日本で受胎告知に相当するものがあるかというお話が出ていましたので、わたしが思いついたのは、弘法大師、空海が生まれる時に、お母さんの玉依姫に、眠っている時に、夢に観世音菩薩が現れて、あなたは尊い方を生みます、その子はお坊さんになります、というようなことがあった。夢の中で、泉のところについて身を清めなさい、泉の水も飲みなさい、と言われた。もったいないお言葉をいただいたと玉依姫が感謝をして、目が覚める。その生まれた子ども、男の子は、お坊さんになりたいと言う。それが浮かびました。受胎告知のようには知られては不是ですけども、調べていくと、日本の高僧の出生時にそういったお話が、他にありそうだなと思いました。

アブラム(ダーリンプル訳)： とてもいいお話をありがとうございました。これもまた一つ話として大事なことと思います。例えば、助教の時岡良太さんは、コウノトリが赤ちゃんを連れてくる話を教えてくれました。わたしが知っている限りでは、ドイツのお話にもこれはあると思いました。こういう物語、ファンタジーは、実は普通の生活の中でとっても大事なことです。子どもは、本当のことを聴く準備が出来た時があると思います。最近では性教育ということで早めに事実を伝えただけの方がいいことがあるのだけど、わたし自身は適当な時があるだろうと思います。

松下：ありがとうございます。それでは他にご質問おありの方どうぞ。

質問者 3：病院に勤務しています。お話の中で、対象を創造する前提に、まず母親の devotion があり、それでイリュージョンに一体化する経験が前提となる。そこで発せられている解釈がその人にとってインパクトを与えていくようなことがあったと思うのですけれども、実際の分析場面でやはり、そういった患者さんとの関係の中でイリュージョナルな世界を持てるか、そういうものが前提となると考えていいのでしょうか。というのは、大人ですので、そのあたりの、簡単にお互いが分かり合っていて、分析家に理解されていると感じて、自分が考えたことが分析家にもそのままわかっているという関係はそれほど簡単に実現するものではなく、そういったものがある程度成熟してきた中で、interpretation が意味をなすのか。そのあたりの、前提としての devotion とかイリュージョンの世界があるのかを少しお聞きしたいです。

アブラム(ダーリンプル訳)： その通りだと思います。まずは、分析の状況の中で転移がありますよね。その転移の中で、関係が発展していくと思います。転移をとっても大事にする必要があると思うのですが、患者さんがこられて、寝椅子に寝る、あるいは前に座る。そういう状態の時に、分析家であれ、カウンセラーであれ、患者さんの前でとてもオープンにいる必要があると思います。そして、そこで何を患者さんが持ってきたか、何を投げ込んできたかをしっかり捉えていく。そしてそこでしっかり考えていく、これは一体なのだろうか、としっかり考えていくことが重要だと思います。そのことによって、関係がだんだんと作られていくと思いますので、おっしゃる通りだと思います。まずそこに、とても時間がかかるだろうと思います。

松下：ありがとうございます。それでは他にご質問ございますか。

質問者 4： 受胎告知、神の子を宿したという祝福と共に、夫以外の子どもを宿したという石打ちの刑が、確かあったと思います。マリアは、確か、ヨセフという婚約者がいて、その当時の社会ですと、夫以外の子どもを宿したものに対して、女の人に対して、石を持って打ち殺してもいいという風習があったと思います。受胎告知というと、神の子を宿した祝福だけではなくて、そういうペナルティがあると思います。そういうところから、クライアントに対しての告知、その事実を知らしめるペナルティ的な何かも出てくるかなと思います。そのようなことについてはどのようにお考えになられますか。

アブラム（ダーリンブル訳）： まず、わたし自身はその事実を伝えることがペナルティにならないことを、望んでいます。そしてわたし自身は、もちろん解釈をしていく時に、誰もがそうだと思いますけれども、それが助けになるようにと思います。それがとてもトラウマティックな、トラウマ的なものになることはあり得ると思います。例えば、岡野先生が先ほど言われた女優さんの例で、あなたセックスしたくないのねと簡単に言った時に、実は患者さんの歴史が、自分自身の歴史の中で、セクシュアルアビュース、性的な虐待を受けたことがもしあったとしたら、それはとてもトラウマ的なものになることもあり得る。その前の質問とつながりますけれども、まずはその人をしっかりと知っていく、その人がどういう歴史を持っているかをきちんと丁寧に見ていく。そして、では、その人に対してどう話しかけて行けばいいのかを掴んでいくことがとても大事だと思います。

松下： よろしいでしょうか。時間の都合で、最後の質問になるかなと思いますけれども、どうですか。

質問者 5： 質問は、マノッチの絵についてです。印象がまだ残っているので、言語の世界にうまく戻れていないのですが。印象とそれから受胎告知を聞き入れることについてお聞きしたいと思います。マノッチの絵は受胎告知の絵、影響を受けたことなのですが、この絵の印象は、恐れ、不安、暴力が、彩られていると思います。それは自分の運命、ある日神の子を妊娠する運命を受け入れることに伴う恐れであったり、暴力性であったり、喜ばしいことのもう片方を表しているように思います。ただこれを受け入れる文化が西洋だとすると、日本の神話では、女性が出産や結婚をめぐる暴力にさらされることが、結構あると思います。その比較をした時に、そういう連想が浮かんだことが一点。それと、この受け入れきれないかもしれないことがある時に、日本で精神分析が可能かという話題にも少しつながるかなと思いました。質問というよりは連想なのですが、なんで受け入れられたのかについて、何かお聞きできればと思います。

ダーリンブル： なんで受け入れられたのかっていうのは、マリアがその受胎告知を受け入れられたかってことですね？

アブラム（ダーリンブル訳）： まずは、自分自身は今の質問の中で思っているのが、分析ということもお話していますけれども、日本の、無意識の中の心理を言われているのかなと思います。これは、探究していくことはとても面白いことだと思います。もしかしたら、世界中を色々見て行くと、精神分析が受け入れやすいところとそうでないところであると思います。大きな質問かなと思います。

二つ目の質問。それはマリアがどう受け止めて行ったかという四番目のコンディション。服従、

ですけれども、例えばその、わたしたちがどのように自分自身の中のセクシュアリティの部分が発達させていくのかとそれぞれに繋がっていきます。例えば、それができたらトラウマ的なものにならないで楽しめるものになっていくことがいいかなと思います。例えば、フロイトの一番初めのシーン、つまり、いつ、どんな時に自分たちの親がベッドルーム、寝室の向こうで何が起きているか知っていく場面。つまり、わたし達がどのように成熟していく、だんだん受け入れていくこと、そのプロセスが大事だろうと思います。先ほどの質問に繋がっていきますけれども、やはりわたし達が、例えば、お互いに患者さんと自分がどのようにお互いを知っていくのかはとても大事だと思っています。例えば、わたしには患者さんで 12 年、14 年も付き合っている人がいます。わたし達はお互いにどのように話すだろうかとか、どのような会話をするのかお互いに知っている部分もちろんあります。けれども、今でも、知っている部分とやはり違って、お互いに学んでいくことが絶えず続いている。それが、わたしが最後にまとめのところで言ったところです。絶えず最後まで自分自身を発展させていく、無限の潜在的可能性を提供していくプロセスの中にいることが大事だと思います。

松下： ありがとうございます。少しお時間超過してしまいました。まだまだお聞きになりたいことがおありかと思います。わたしも、また聞きたいこと出てきてしまいましたけれども、時間が参りましたので、これで公開講座を終了させていただきたいと思います。最後にジャン・アブラム先生とダーリンブル規子先生、ありがとうございました。(拍手)